



西浦

桐見川の七夕



犬 馬

越知町の西部・桐見川地区に、県内では珍しい、勇壮で大変風情のある「七夕」がある。「七夕」が行われるのは、下の谷・西浦・潰野集落で、毎年旧暦7月7日に行われてきた。規模の違いはあるが、飾り付けをした注連縄を谷に渡すという一風変わった「七夕」である。中でも、西浦集落のものは、スケールが大きく、集落側から谷を挟んで対岸の檜の自然木に張った注連縄の長さは、100m以上にも及ぶ実に壮大でかつ芸術的なものであり、初めてこれを見た時の感動は一人であった。

西浦集落の七夕飾りは、色鮮やかな五色の弊（赤・黄・緑～青・白・紫）を主に、両端の“ボウトウ”と呼ばれる藁で作った房に似たものの中に、薄板で作った機織の道具もしくはそれに由来すると思われる飾り（刀・包丁・糸巻き・菱）、それに、藁で編んだ馬・犬である。

桐見川地区の伝承では、「彦星は刀を差して馬に乗ってやって来て、注連縄の上で織姫と出逢い、そこで織姫は機織機で彦星に着物を織る」と言われており、七夕の飾り付けは、この謂れが基になっていることが推測されるが、そればかりではないようである。すなわち、飾り付けは、機織が上達することを願うために機織機の部品を抽象化したものが中心になっていることが伺われ、潰野集落の七夕には、糸巻き・菱の他に、西浦や下の谷集落には見られない機織の篋や糸車の輪をイメージしたと思われる飾り付けがある。また、これらとセットになって吊るされている刀や包丁も機織機の部品の一部を抽象化したものではないかという見解もあるが、刀については、魔除けの道具に転じたことも考えられるし、単純に彦星が身に着けていたことに基づくものなのかもしれない。

一方、これらの機織に基づく飾り付けの他に、藁で編んだ馬や犬があるが、「馬」に関してはオス・メスがいる（西浦地区ではかつて両方あったが現在は中性で一頭のみ）ことから、彦星の乗り物として以外に、子

孫繁栄を願うためのものであることも考えられる。「犬」に関しては、それが安産で子沢山であることから、恐らくそのことを子孫繁栄とともに願ったのであろう。また、下の谷地区では、タイモ・ホオズキ・トウモロコシ（本来はキビ）などの野菜・穀物が飾られているが、これについては五穀豊穡を願うためのものであると考えられる。

七夕祭りの準備は一週間前から始まり、「注連縄編み」を男性が、そしてそれに垂らす五色の紙で作る「四手（垂）」を女性が分担する。祭りの当日は、日の出前の朝5時から注連縄に飾り付けを行い、それが終わると注連縄を谷に渡す。すべてが完了すると、注連縄の下谷側に掛る小橋の上で和やかに“直会”（小宴会）が催される。地域の発展と繁栄を願い、住民が心一つにして祭りに取り組み、親睦を深め、“和”を以て結び付きを強くする行事と言える。

それぞれの地域に伝わる「七夕」の歴史についてはあまりはっきりしないが、西浦集落のものは、少なくとも明治以降（一説では江戸後期）にまで遡るようである。

同じ桐見川地区の「七夕」でも、地域によってその飾り付けが微妙に異なり、それぞれの示す意味を正確に理解するのは難しい。また、後継者不足等から、下の谷集落では3年前から新暦7月の第1日曜に行うようになり、西浦集落では今年は馬の飾りを作る者がいなくなり、下の谷集落が応援に駆け付け無事行うことができたという。祭りに詳しい古老がいなくなったり、途中で行事が中断したりすると、本来のスタイルやそれが意味するものが失われてしまうこともあるので、できるだけ古来から受け継がれたスタイルを踏襲し、地域に伝わる素晴らしい貴重な伝統行事を確実に後世に継承していった欲しいものである。

※公益財団法人「国際文化カレッジ」主催の「第18回総合写真展」（応募作品：3752点）が2014年12月に開催され、西浦集落の七夕の宴を題材にした作品「朝の宴（七夕）」（高知県南国市在住写真家）が「内閣総理大臣賞」を受賞した。



コオロギラン

牧野先生を講師に迎えての 「第一回植物採集研究会」について

大倉 浩典

昭和9(1934)年8月、牧野富太郎・吉永虎馬両先生を講師に迎え、高知県・高知市両教育会(現教育委員会)並びに高知県博物学会との連合主催により実施された「植物採集研究大会」の詳細は、昭和10年4月に刊行された高知博物学会機関誌『博物会報第三号』(昭和9年採集会記念号)に収録されている。今回、その中の横倉山に関する部分を中心に、その前後も含め改めて紹介致します。

牧野先生を迎えての植物採集会は、大正14年再出発した高知博物学会の永年の夢であったが中々実現しなかった。たまたま昭和8年6月、牧野先生とは同郷の佐川(斗賀野)出身の医師で植物研究家の秋澤明氏^{※1}が所用で上京した折、久方振りに博士を訪ね四方山話の中で、博士から「植物の國土佐に同好会の組織がないのは甚だ遺憾に思われて仕方がない。及ばずながら援助を惜しまないから帰ったら一つその企を起しては……」とのご意見を承った。急遽帰郷早速その計画を高知博物学会幹事・伊藤和貴氏^{※2}、博物学会々長・小川重雄氏、高知高等学校(現高知大学)講師・吉永虎馬氏にはかり、昭和9年8月を期してその計画を実現せんものと直ちにその旨を東京の牧野先生に報告すると同時に県内での受入体制の準備が始まった。その準備の一つに吉永先生の提案で牧野先生を講師としてお迎えするに当り、一般会員の植物についての知識の向上を計るため高知博物学会とは別に「土佐植物同好会」を組織し、早速昭和8年9月から吉永先生を講師として横倉山を皮切りに朴の川山、工石山、梶ヶ森等毎月一回会員60名位いで植物採集を行い、本番の「植物採集研究会」に備えた。昭和9年7月には県・市の交渉も全て完了、県外からの参加申込みも多数あり総数100名を越し中々の盛況が予想された。

【植物採集会】

◆第一日、長濱方面(抜粋要約)

昭和9年8月1日午前8時30分、県立城東中学校(現追手前高校)講堂前で受付開始、県内外からの会員が続々と見えられ予定人員を突破し130名を越してしまう。最終的には県内会員101名、県外会員37名、総数138名となった。

午前10時高知博物学会々長小川重雄氏^{※3}の開講式、引き続き牧野博士の講演にうつり午前11時終了。記念写真撮影後直ちに全員梅ノ辻バス停留場から長浜行きバスに分乗、30分後集合予定地である長浜若宮八幡宮境内に到着。神官大久保千濤氏並に長浜小学校長岡村誠真氏のご好意により湯茶の接待を受け、一時間の予定で昼食を攝る。

午後1時休憩所を出発し海岸にでる。浜辺を歩きながら植物を採集し午後4時半過ぎ漸くにして桂浜灯台まで来た。掘割を抜けて5時

過ぎ桂浜の茶店にて一服の後坂本龍馬像を拝し巡航船乗場浦戸へ急ぐ。高知行午後5時40分発の巡航船に多数の収穫品を載せ無事第一日を終了。

◆第二日、横倉山方面(原文のまま)

今日は第二日横倉山採集日である。横倉山は人も知る靈山で歴史的にも種々の傳説史實を有シ興味深き山である。ために四時登山者の絶えない所で、之を植物分布上より見ても海拔僅か1000米に過ぎないこの山が、植物種類に至っては實に豊富殊に牧野先生の研究道場として幾多の新變種が學界に提供され、當時の學徒をして睡涎の的たらしめた事は今更附言しなくとも事實が雄辯に物語っている、今その著名なもの二、三を列挙すれば

- | | |
|-----------|------------------------------------|
| コホ(オ)ロギラン | 世界的稀品、明治廿四年始めて発見、後大正十一年吉永先生採集以後未見。 |
| ヨコグラノキ | 明治十七年八月、當山にて採集せしものを發表、爾後各地に発見さる。 |
| ヨコグラツクバネ | 明治四十五年織田千齡氏採集せしものを發表。 |
| ヨコグラブドウ | 大正七年發表、今は絶滅の狀態。 |
| イハ(ワ)シデ | 大正二年發表、後縣外諸地方に発見さる。 |
| ミドリワラビ | 明治十七年八月、採集發表。 |

其他多數の珍木稀草を秘めた深

山で四季折々興味多き好採集場

である。然るに近來經濟界の變動は遂にこの靈山迄も襲ひ千古の故事を秘める巨木大樹は敢無くも身賣りのはかなさに陥り、素気無き斧鉄の音は無遠慮のこの緑樹の間にこだまして遠く遠くへ響いていく。斯くして亡び行く

この山に對して一種の悲哀を痛感

せずには居られない。斯くも植物の歴史的に意味付けられてゐる山だけに、山に對する執着も一層その深さを増すのである。

午前七時、豫定の越知橋畔に集合、二十五分登山口から山にかゝる。文徳附近でマルバツユクサが澤山目につく。面白い地下結實に就いて吉永先生から御話を承る。ピラウドキビ(ビロードキビ)、アリノタフ、イヌエンジュなどを採集。陽は容赦なく背中から照りつける。誰か「まるで背中あぶりじゃ」と半畳を入れる。涼しい木蔭でアケビの語原に關する博士の面白い閑談一くさり。

坂は益々きつくなる。道々採集したものにケナシウシコロシ、ヤマテリハノイバラ、ケケンポナシ、テリハガバズミ、アオタゴ、カイナンサラサドウダン、オト



ヨコグラツクバネ



ヨコグラノキ



ヨコグラブドウ【絶滅種】
(東京都立大学牧野標本館 寄贈)

コブドウ、ソヨゴなど、赤土峠のマ(モ)ウセンゴケは、可成勢よく繁殖してゐる。もう五合目近く迄登ってゐる。路は横道にかゝって大そう楽になる。ムカゴソウ、ベニドウダン、ホウライカヅ(ズ)ラ、ルリミノウシコロシ、ナンキンナナカマド、ヤマカモジグサ、カキラン、ミヤマウグイスカグラ、シラクチヅル、ウラジロウツギ、ウラジログアシ、ヨグソ

ミネバリ、ケサンカクヅル、ヒメワラビ、ヤマイヌワラビ、タニイヌワラビ、ケタガネサ(ソ)ウ、ツルニガクサ、イヌシデ、クマシデなど多数洞窟に収める。石段の側にある横倉山標柱が眼を引く。愈々これからが採集の道場だ。

薄暗い大木の間を石段に沿ふて登る。コフウロ、ヤブソテツ、マルバコンロンサ(ソ)ウ、ヤマヤブソテツ、サハ(ワ)ハコベ、ヒメウワバミサ(ソ)ウ、コミヤマスマシレ、キヨスミヒメワラビ、ハへ(エ)ドクサ(ソ)ウなど陰湿地の分子が多数に見える。石段を登りつめると杉原神社はもうすぐそこだ。先着の者の聲が手にとる様に聞こえて来る。以前大分見付かかったと云ふコホ(オ)ロギランは遂に見ることが出来なかった。マツラン、ムギラン、ミヤマカタバミ、ナベワリ、タイミンガサモドキなど採集して午前十一時半杉原神社に着く。今迄フロラ(フローラ flora: 植物相)中に見えなかったフジシダが誰かによって採集されてゐた。約一時間の豫定で境内で晝食をとる。今日は特に地元越知町長並に横倉山史蹟保存會長藤原豊安氏の御好意に湯茶及びサイダーの饗應を受ける。零時半、社前で記念の寫眞を寫し、これより金峯山神社(現横倉宮)に向ふ。山は愈々深く會員の採集熱は其のクライマックスに達する。途中収めたものにオオヒロバイヌワラビ、ホソバイヌワラビ、ミドリワラビ、ウスヒメワラビ、イハへゴ、ハイミヤマシキミ、シンミズヒキ、スズカウジュ、シソバツツナミ、ヤマタフバナ、ムエウラン、ヌリワラビ、キヨタキシダ、ワ(オ)ウレンシダなどあり。特に師範學校生徒安井松展君の採品中にマヤランの美しく開花したものがあつた。もと攝津の摩耶山で発見された蘭科の一品種で當横倉山のフロラの中に新一種を加える事が出来たわけである。

金峯神社に参拜の後、社裏の險、バカダメシに出る。風化された石灰岩上にはヨコグラノキ、イハ(ワ)シデ、イハ(ワ)ツクバネウツギの稀品が茂り、特にヨコグラノキは牧野先生名付けの木だけに一層深い懐しさを御感じになられたのかしばし感慨無量の様伺はれた。紀念に一枝と梢の方をロープでひかれて手折られて洞窟に収める。

下山の時間が餘程切迫したのでそのまゝ、こゝから住吉神社の方へ走る。ヒロハヤブソテツ、ヨコグラツクバネがぼつぼつ見える。午後2時過ぎ住吉の岩上に立つことが出来た。クロソヨゴ、ケイビラン、ウテ(チヨ)ウラン、ミヤマガンピ、ナンキンナナカマド、ヒメスマシレ、トサノミツバツツジなどが岩壁に着生してゐる。

午後二時半、道を元にかへして、約束の三時杉原神社

に歸へる。大半は三々五々下山して我々一團が殿をつとめてゐる。漸くのことで楠神登山口に下りたのがもう四時近くであつた。仁淀川沿の松山街道を越知町バス停留場へ。今日の收穫に勇を鼓して急ぐ。

◆第三日、室戸岬(抜粋要約)

今日は第三日最終の室戸行である。午前6時会員一同本町野村自動車会社車庫前に集合、7台の大型遊覧自動車は爽やかな朝の空気の中をまっしぐらに電車通りを東へ郊外に出る。途中大篠村(現南国市)で長尾鶏を鑑賞、午前9時30分安芸伊尾木の洞窟前で下車、天然記念物指定地のシダ群落を視察、吉永先生から説明を受ける。午前10時伊尾木洞を後に途中大山岬でハマホラシノブ、キキョウラン、タイトゴメ、シホ(オ)ギク、キンギンナスビなど南方系植物を採集しながら午前11時室戸岬に到着。

吉永先生より当室戸岬が天然記念物に指定されるに至る迄の経過や特殊植物の概要についての説明及び採集上の注意を受け、午後3時保勝会館前に集合の約束で解散自由行動となる。

午後3時一同保勝会館前に集合、牧野先生からお話があり閉会、記念撮影を午後3時30分無事第三日目の採集会を終る。



◆最後に

このようにして3日間にわたる採集会も天候をはじめ全てに恵まれ、多大の効果を収め無事終了することが出来たことを嬉しく思うと同時に、牧野先生のご来県がどれだけ県下教育会に影響したかは今更云う迄もなく、これを機会に益々同好の気分を高め、再度先生をお迎へすることの出来るように最善の努力を尽したいものである。
(昭和9年8月12日 稿終る)

※1 秋澤 明 (1882-1973)

明治15年12月12日佐川町斗賀野生まれ。明治43年27歳で東京医学校(現東大医学部)入学、地元佐川町で耳鼻科医院、後に高知市中島町で秋澤耳鼻咽喉科医院を開業し医業に従事する。一方、郷里の先輩である牧野博士や吉永先生から直接指導を受け植物研究にも熱中し、植物採集のためしばしば休診することでも有名であった。専門はシダ植物で、県内はもとより全国各地を訪れる。特に、台湾には、大正4年から昭和12年まで毎年のように医師として出張、診療の合間に周辺で植物採集をしていたようである。昭和4年4月に高知博物館に入会し、同会に対して絶えず財政面で援助するなどその発展に貢献した。昭和48年90歳で亡くなる。

※2 伊藤和貴 (1876-1954)

明治9年茨城県水戸市生まれ。大正13年高知私立土佐中学校(現土佐高校)教諭として赴任、昭和11年60歳まで勤務。高知博物館に入会、同じ会員たちと発起人となり、博物研究者であれば誰でも入会できる新しい形の高知博物館を設立。高知県博物館の発展に大いに貢献した。専門は、植物学全般であるが鳥類にも造詣が深く、特にヤイロチョウについて高知県に於ける生態を調査研究し、昭和11、12年とラジオ放送を通して県民に初めて紹介し、ヤイロチョウが「県の鳥」に指定されるきっかけになった。昭和9年の「第一回植物採集研究会」のために帰高した牧野博士は、高知市南幸公人町一丁目七番地の伊藤氏宅を宿所とし、以後も高知に帰る時はいつもそこを宿所とし、旅館・ホテルは一切利用しなかったようである。昭和11年土佐中学校を停年退職し、出身地水戸市に引き揚げようとしたが、同僚や先輩・後輩のたつての願いで思い留まり、高知営林局等の嘱託を歴任しながら高知博物館(後に高知博物学会と改称)の総務として最後まで会の発展に尽くした。昭和29年5月14日、高知市で病没(78歳)。

※3 小川重雄 (1884-1946)

高知県立農業学校長で、昭和2年9月から高知博物学会会長として学会発展に貢献した。

(おおくら こうすけ/植物研究家)

横倉山のアカガシ原生林内の“生きた化石植物”

安井 敏夫

横倉山には“アカガシの原生林”と呼ばれる自然の森がある。樹齢数百年と言われるアカガシを主体とし、ウラジロガシ、スタジイなどのブナ科の植物の巨木・古木から成り、“アカガシの原生林”としては、規模は小さいものの日本唯一と言われている。横倉山は戦国時代(1482年)に山火事に遭って全山焼失したと言われているが、そのことを考慮に入れても、500年以上の歴史のある原生林(“原始の森”)であるということになる。原生林の一部には、同年齢の推定樹齢500~600年の天然杉の小群落も見られる。

このような横倉山の原生林内には、植物相が極めて豊富で、植物学者・牧野富太郎の発見・命名した植物も多く、コオロギランのような世界的な超希少植物を始め数多くの希少植物が自生し、“生きた化石植物”も見られる。

横倉山で見られる主な“生きた化石植物”には、次のようなものがある。

●ホオノキ



漢名：朴の木〔モクレン科〕

日本特産種。モクレン科の植物は、地球上で最初に花を付けた植物(被子植物)と言われている。中生代白亜紀後期の地層からは葉の、ジュラ紀からは花粉の化石が見つかっており、恐竜(ティラノサウルスやトリケラトプスなど)もその花を見たはずである。

葉は広く大きく殺菌作用があるため、古くから食器代わりに食物を盛ったり、包むのに用いられ、現在でも、

飛騨高山や信州では“朴葉みそ”として、また“朴葉寿司”“朴葉餅”などに使われる。

材はきめが細かく均質で加工しやすく、彫刻、刀(日本刀)の鞘、器具(包丁・鎌など)の柄、下駄、椀などに用いられる。また、昔は版木(木版印刷や版画の用材)にも用いられた。

モクレン科の植物には、この他モクレン、ハクモクレン、オオヤマレンゲ、コブシなどがある。

ちなみに、モクレン科の植物が登場する時期に、ブナ科・クルミ科・カエデ科・シュロ科・ハス科などの植物も出そろふ。大気汚染に弱い。

●カツラ

漢名：桂〔カツラ科〕

日本固有種で、現在地球上に日本にしか生育していない。日本では、本州に「ヒロハカツラ」というのがあり、地球上では中国に「カツラ」の亜種があるのみである。ちなみに、中国でいう「桂」はクスノキ科のニッケイ(肉桂)などを指す。

花粉の化石は、北半球のあちこちの中生代白亜紀の地層(少なくとも6500万年以前)から見つかっ

て、日本からは、北海道の新生代古第三紀始新世の地層[5580~3390万年前]からカツラの仲間の葉の化石が見つかっている(写真)。

葉はハート形で対生し、葉縁には波状の鈍鋸歯がある。黄葉すると醤油のようなほのかな甘い香りがし、和名は「香出(香りが出る)」に由来するといわれている。また、別名“香の木”で、抹香(沈香・白檀などの粉末を混ぜて作った香)が作られた。

花は小枝に対生して咲き、葉に先立って多数開花するが、花卉や萼(ガク)はない。材は緻密で良質、腐食しにくいので、鎌倉彫などの彫刻材や仏像・面(能面など)、碁盤・将棋盤(カヤが最高級品)、琵琶の胴などの楽器材、鉛筆の材などに用いられる。

現在横倉山の遊歩道沿いには6本のカツラがあり、内4本が巨木である。安徳天皇の「行在所跡」にある2本のカツラの内1本(2本立て)が一番大きい(幹周り:

7.25m)。本標本のように、大木ではしばしば根本からたくさんの幹を出すことがある。

かつては、夫婦杉-杉原神社の参道石段南の林内に、推定樹齢500年という古木(“大カツラ”)があったようであるが、現在は見られない。

●ヤブニッケイ

漢名：藪肉桂〔クスノキ科〕

クスノキ科の植物は、化石としてよく産出し、中生代白亜紀に現れ、次の新生代第三紀の植物の主要メンバーの一つであった。

葉はクスノキによく似るが、クスノキに比べて細長く、葉脈の分岐点の膨らみはない。互生し、鋸歯はない。常

緑であるが、葉の寿命は1年で、春に新葉が出る頃に前年の葉は落ちる。葉を揉むと樟脳に似た芳香がある。全体は「ニッケイ(肉桂)」に似るが、香りは少ない。ちなみに、ニッケイはインド



化石



シナ原産で、江戸時代に中国を経て渡来。樹皮を乾燥して「セエイロン ニッケイ（シナモン）」として香辛料に用いられる。

●クスノキ

クスノキ科の代表的な植物である「クスノキ」は、ニッケイ属に属し（原産地ははっきりしない）、全体に芳香（樟脳の香り）があり、防虫剤の「ショウノウ」を採る。木目が美しく防虫効果があるためか、日本の仏像の中でも飛鳥時代に造られた仏像の多くはクスノキが素材で、法隆寺五重塔もクスノキで建てられている。平安時代になると、クスノキに代わり生長の早いヒノキが使用されるようになる。

日本の広葉樹の中で最も長命で、スギ、ケヤキとともに巨木の“ベスト3”に位置し、樹齢が数百年～1000年を超えるものがある。しばしば公園や社寺林に植えられ、大きく成長するため神社などで神木として崇められている巨樹も多い（例：愛媛県大三島・大山祇神社）。高知県では、街路樹としてもよく植えられる。広島県厳島（宮島）・厳島神社の大鳥居はクスノキ（樟）の自然木が用いられる。

●ギンバイソウ

漢名：銀梅草〔ユキノシタ科〕

中国湖北省に近縁種のものがあり、“氷河時代の遺存植物（レリック）”と言われている。

横倉山の植物（草本）の中で数少ない小群生が見られる。県内でも天狗高原を始め四国中央部の1000m以上の山地で所々見られるものの群生地は少なく、四国では剣山でもキレンゲショウマの群生の中にわずかに見られる。



●スギ

スギ科。日本特産種。

1属1種で、日本と中国の一部に自生するだけであり、古い“残存種（遺存種）”であると考えられる。化石は多くはないが、中生代白亜紀からスギ属に同定されているものが見つかっている。現在、地球上では、アメリカ大陸に「セコイア」、中国に「メタセコイア」が遺存種として残っている。

“まっすぐ（直ぐ）な木”からその名がある。

寿命の長い木として知られ、全国に大木が残っている（例：屋久島の“縄文杉”、高知県大豊町の“杉の大杉”など）。ふつう自然状態では広葉樹と混生する（横倉山・杉原神社の大杉）が、純林を作ることもある。

●ヒノキ

ヒノキ科。日本特産種。

ヒノキ科の植物はスギと同様中生代に登場した起源の古い植物群で、現在日本と台湾にのみ分布する。“日本

を代表する樹木”（日本特産）で、緻密で硬く（年輪が密）、しかも芳香性があり、建材としては最高品質のものである。ただし、茶室の柱などは、ヒノキではなくスギを用いる。

スギによく似たものに「ヒノキ」があるが、樹皮は縦に裂け、葉は鱗片状。他の針葉樹と混生、または純林を作る。

ヒノキの「ヒ」は「火」を表し、古くはヒノキとヤマビワを擦り合せて火をおこし、樹皮は神社などの檜皮葺屋根根に使う。ヒノキの床を足で踏むと音の響きが良いため、能舞台などに使用され、「腕前を広く示すためにふさわしい晴れの場所」を“檜舞台”という。

●ツバキ

ツバキ科の常緑高木で、照葉樹林を代表する樹木。

ツバキ科の中のツバキ属・ナツツバキ属などは、新生代第三紀よりその化石が知られており、ツバキ科は熱帯より暖帯にかけて多く、温帯には少ないので、この科の化石の産出は暖かい気候を示している（「示相化石」）。「ツバキ」の名の語源は、「厚葉木」「艶葉木」また、花が刀の鏢に似ているからとする説などがある。ちなみに、ツバキは、花がポロッと落ち武士が切腹して首を切り落とされること（介錯）を連想するため武士の家の庭には植えない。

種子からは「椿油」と呼ばれる良質の油が採取でき、整髪用（例：相撲の力士の髪結いに使う鬘付け油として使用）、食用などに用いられる。

飛膜が発達して木から木へ滑空するムササビ（リス科）は、ツバキの実やスギの実などをえさとする。



●シダ

シダ（羊歯）植物の一綱。シダ植物は、マツバラノ類・ヒカゲノカズラ類・トクサ類・シダ類の4つの群に分けられ、それらの多くは、温暖・湿潤な気候の中生代（特にジュラ～白亜紀）に栄えた“生きた化石”である。日本では、沖縄などの亜熱帯地域にはヒカゲヘゴなどの巨大シダがジャングルを形成し、さながら“恐竜時代”を思わせるかのような光景である。

シダ植物は、古生代シルル紀に現れ、日本では、次のデボン紀後期〔約3億6000万年前〕の日本最古の陸上植物化石である「リン木（鱗木）」が横倉山などで見つかっている。これは、“生きた化石”のヒカゲノカズラ類に属する木本性シダ植物である。ちなみに、コケ植物が地球上に現れるのもデボン紀後期である。

花も種子もないのに増殖するため、ヨーロッパでは古くから“魔法の草”とされ、また常緑で茂ることから、日本では繁栄と長寿を願う正月用の飾り物（お締め・輪飾り）として使われる。

（やすい としお／横倉山自然の森博物館 学芸員）

博物館行事

企画展：『布が咲くーにしみねくみ 草木染の物作りー』

2015年2月11日(水・祝)～3月29日(日)



植物の樹皮・根・葉・実や野菜・果物などから採った色素を用いて染める「草木染」。その上品で落ち着いた色

合いには幅広い人気がある。

今回は、染色作家・にしみね くみ(高知県出身)による10年振りの草木染の作品展。木の幹、葉、草花、野菜などを使って染めたタペストリーを始め、のれん・平面オブジェ(壁飾りなど)・ハガキ掛けなどのオリジナル作品約100点を展示。関連イベントとして、『染色教室』(絹のストール作り)を行い、皆個性のある素敵な色合い、柄の作品が仕上がった。

主な感想として、「淡い色合いで素敵でした」「色合いが優しくてきれいでした」「草木染はやさしい色合いで温かい。私もやりますが色が出ず根気がいらいます」「とても落ち着いた色で心が和みます。布が咲き、布が喜んでいるような感じがする」などがあった。

“布に色を移し、色々なものに仕立て、部屋中優しい色で満ち、心癒される空間を作りたい”そんな作者の思いのこもった企画展であったような気がする。



企画展：『第37回 高知県写真家協会展「土佐」』(選抜移動展)

2015年6月17日(水)～6月28日(日)

土佐に古くから伝わる伝統芸能や行事、移りゆく土佐の風物を主体に、生業、シャッターチャンスやカメラアングルを生かした数々の作品96点が並んだ。

越知町関係では、『越知町長賞』に「柴尾の野焼き」(山本多恵・越知町)、『横倉山自然の森博物館賞』に「祭りの佳境」(岡崎省吾・中土佐町)が選ばれた。

企画展：『土佐のカエル 2015』

2015年7月18日(土)～9月6日(日)

〔協力：認定NPO法人 四国自然史科学研究センター〕

私たち人類にとって身近な生きものの一つで、古くからかかわりの深い「カエル」。その生態系における位置付け・役割等の“存在意義”を学ぶとともに、高知県における分布・種類及び個体数から、それらが何を意味するかについて考える。動植物の分布、特に皮膚がむき出しになっているカエルは環境に左右されやすいので、自然環境の目安として重要であり、環境の指標となり得る。平成17年夏の企画展：『土佐のカエル』以来10年経った現在、どのような

変化があったのかについても併せて見てみる。

今回の企画展の主な内容は、「カエルとは?」「カエルと生きもののかかわり」「カエルと人のかかわり」「越知町に生息するカエル」「カエルの危機」などで、主な展示資料として、実際に生きたカエル約10種を水槽で生態展示する他、写真パネル、カエルが食べる昆虫標本、カエルを食べる動物、カエルグッズなど約200点を展示する。また、カエルのフィギュア(“ガチャガチャ”)、カエルに関するQ&Aなども準備、関連イベントとして、『カエルに触ってみよう』(指導：四国自然史科学研究センター)を催し、カエルを身近なものとして親しんでもらう。

カエルが食べる小動物(主として昆虫)には実にさまざまなものがあり、逆にカエルを食べる動物も多種多様で、食物連鎖の上に成り立っている。この点、カエルの生態系における重要な役割・存在意義が推し測られる。

主な感想として、次のようなものがあった。「カエルの展示やクイズ、詳細の書かれたパネルなど大変楽しかった」



「カエルがいる環境=自然豊かということがよくわかりました」「カエルについて多面的にとらえられて、良い勉強になりました」「すばらしい展示です。写真の数と内容を揃えるのはさぞ大変だったのでは…」「人とカエルとの共存のために、私たちにできることを少しでもできればと思います」「実物あり、音あり、グッズ・メッセージありと、いろいろあっておもしろかった」「とても楽しかったです。カエル大好きです」

《職業体験》

2015年7月22日(水)～24日(金)

毎年、地元越知中学校3年の生徒2名を「職業体験」として受け入れている。博物館の基本的かつ重要である、資料の収集から処理・登録を経て展示・保管するまでの一連の作業を行ってもらう。具体的には、化石の採集、クリーニング、希塩酸による処理、植物標本作り、資料カード作成、パソコンを使っての企画展用のチラシ・ポスター作りなどである。

作業に入る前に、館の運営・広報活動や資料の借用手続き、展示の仕方などについて教示する。

〔夏休み工作教室ー勾玉作りー〕

2015年8月1日(土)〔講師指導：公益財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター、参加者(小・中学生対象)：22名〕

最初に「勾玉についてー勾玉とは何かー」の話を聞く。「勾玉」とは、古代人が石(主にヒスイ・メノウ)で作った装身具(首飾り)で、御守り・魔除け、また権力の象徴としても用いられた。それが何を意味するかについて



は、①耳飾り、②首飾り、③胎児、④月の四つの説があるが、①が最有力説という。『日本書紀』には「曲玉（“曲がった

玉）」とある。

勾玉作りでは、材料として「滑石」〔^{かっせき}鉱物の中で最も柔らかく硬度1（蠟石）〕を使用する。四角く切った滑石の板に各自好きな勾玉の型紙を使って鉛筆で輪郭を描き、それに沿ってノコギリでだまかに切り、その後3種の粗さの紙ヤスリで削って行って丸みを出す。

最後に耐水ペーパーで水に漬けながら磨いたあと、新聞紙で磨いてツヤを出すと仕上がりとなる。サインペンで自分の好きな色を塗ることもできるという。

感想としては、歴史の勉強にもなり「難しかったけど、楽しかった」というのが多く、特に丸く削るのが難しかったようである。「勾玉に興味を持ちました」「勾玉がいつから作られて、どのようにして作るかがわかってうれしかったです」などの感想もあった。

夏休み博物館教室〔工作〕(小・中学生対象)

2015年8月22日(土)〔講師指導：日本リサイクル万華鏡協会 橋本 優氏、参加者：午前の部 8名、午後の部 15名〕



恒例となった美しく夢のある「オリジナル万華鏡」作りと、残った時間で、ペットボトルを用いた

「空気砲」作りを行う。模様がひとりごとに徐々に変わる“オリジナル万華鏡”は、最近では1時間ほどで仕上がるようになった。「空気砲」は、500ml ペットボトルを用い、底を切除してゴム風船をかぶせ、それを引っ張って放すことによって空気を発射させる仕組みである。初めての経験に、万華鏡以上に子供たちのはしゃぐ姿が見られた。

主な感想として、「おもしろかった」「万華鏡をのぞいたらきれいでびっくりしました」「想像してたものと違って楽しかった」などがあった。

〔夏休みの自由研究〕(主催：森の検定こうち実行委員会)

—身近にある“生きた化石植物”を調べてみよう—

2015年8月2日(日)〔講師：安井敏夫(横倉山自然の森博物館学芸員)、参加者：8名(小学3～6年生)〕

日本唯一のアカガシの原生林が残る横倉山において、“生きた化石植物”について学習し、子供たちの自由研究のサポートを行う。



横倉山の原生林内で見られる主な“生きた化石植物”

には、ホオノキ、カツラ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、ギンバイソウ、スギ、ヒノキ、各種シダなどである。この中で、特にカツラは日本固有種で、現在地球上に日本にしか生育していない。安徳天皇の「行在所跡」に2本の巨木があり、樹齢数百年のブナ科のアカガシ、スダジイや500～600年の大杉などとともに、横倉山における名物となっている。(詳細は本文にあり)

テーマの終わりに、簡単な検定問題(10問)を行い、参加者の理解度をチェックし、最後に「終了証書」を全員に発行して終了する。

主な感想として、「化石植物はすごくあることが分かりました。それに、身近なスギやヒノキ、ツバキなども化石植物だということも分かりました。楽しかったです」(6年生女子)などがあった。

友の会だより

「天体観測—皆既月食—」

2015年4月4日(土)

天候不順により中止。

「土佐の投入堂」聖神社とアケボノツツジ観察会

2015年4月18日(土) 晴れ〔参加者：16名(内 事務局3名)〕

晴天に恵まれ、新緑の深まりつつある越知町南西端の小日浦地区に、毎年恒例の聖神社とアケボノツツジの群生を観に行く。



聖神社(“土佐の投入堂”)へは、神社の立つ谷の左岸の岩場へ直接登る組と対岸

から眺めて途中から通常のルートに合流する組とに分かれて目指した。道中には、サトイモ科のアオмамシグサやママシグサ、ユキモチソウなどの植物が今が見ごろであった。

この上流部にあつて人気の高いピンク色のケボノツツジは、残念ながらピークを過ぎていて、すでに散ってしまっているものもあったが、樹下の黄色のヒカゲツツジはほぼ満開状態だった。牧野博士の発見・命名による薄紫色のトサノミツバツツジは、あちこちに点在し今が見頃だった。地元小日浦出身の「聖の里小日浦保存会」有志により、アケボノツツジ群生地地の岩場が約200mにわたって散策道として整備されているので観察しやすく、来年に期待したい。

道中の坂折川(往)と長者川(復)の岸部の岩場には、牧野博士の発見・命名の薄赤紫色の「キシツツジ」が所々で咲き誇っていた。

「横倉山杉原神社のヒメボタル観察会」

2015年6月23日(水)〔参加者：36名(内事務局3名)、一般24名)〕

毎年この時期恒例の行事で、シイノトモシビタケ・ギンガタケなどの発行キノコの観察を兼ねて行う。シイノトモシビタケについては、一昨年は豊作、昨年は不作で、今年はずまずであった。ヒメボタルも中々乱舞を見るには至らないが、安徳天皇潜幸伝説の残る原生林内で見るとはかなりの点滅は何処となく情緒がある。

「仁淀川水質調べ」〔身近な水環境全国一斉調査〕

2015年6月17日(水)〔参加者：5名(内事務局2名)〕

①仁淀川本流、②坂折川(支流)、③梅ノ木川(同)の3ヶ所で、COD(化学的酸素要求量)を測定。昨年と同様、①②は「非常にきれい」であるが、やはり市街地内を流れ、家庭排水の流入する③は、昔と比べるとホタルが飛ぶようなきれいな川になったとはいえまだ「汚い」という判定であった。



横倉山ミニ歳時記

■100年振りに再確認!!

「エゾスズラン」 *Epipactis papillosa* Franch. et Sav.

昨年夏、横倉山の南遊歩道(「四国のみち」)で、山野草写真愛好家・萩野善久氏によって、100年振りに「エゾスズラン(アオスズラン)」(ラン科)が確認された。

当初横倉山における最初の発見例と思われたが、その後すぐ見つかった資料から、大正2(1913)年にすでに確認されていることがわかった。地元越知町出身で、『横倉山タイプ植物』の一つである「ヨコグラツクバネ」(ユリ科)の発見者として知られる植物研究家・織田千齡のメモ(「横倉山植物分布図」)中に、「カラ池(空池)附近ニアルモノ(植物)」の一つとして「アオスズラン」が記載されている。「空池」といえば、千齡が最初に「ヨコグラツクバネ」を発見した場所(石灰岩地の小規模なドリーネ)であるが、現在そこには「アオスズラン」は見られない。ちなみに、アオスズラン(エゾスズラン)は、県下では、香北町・大豊町・土佐山田町・仁淀川町(旧仁淀村)・津野町(旧東津野村)の6ヶ所で自生が確認されているのみで、かなり分布が限られる。

横倉山では、このように「何十年振りに見つかった」とかいったような例が時々ある。今後、すでに絶滅されたとされる「ヨコグラツクバネ」(横倉山タイプ植物)も見つかることを期待したい。

植物の宝庫・横倉山は「行く度に何か“出会い”がある」とよく言われ、実に魅力のある奥の深い山である。

※今回見つかった標本は、残念ながら枝が途中で折れていた。

【博物館日誌(抄)・平成27年度博物館行事】

- 2015年2月11日(水・祝)～3月29日(日)
 - 企画展：『布が咲くーにしみねくみ 草木染の物作りー』
- 3月26日(木) 博物館協議会
- 4月4日(土) 天体観測ー皆既月食ー(天候不順により中止)
- 6月17日(水)～6月28日(日) 写真展『土佐』
- 7月18日(土)～9月6日(日)
 - 企画展：『土佐のカエル2015』
- 8月1日(土) 夏休み工作教室「勾玉作り」
- 8月2日(日) 夏休み自由研究サポート事業
- 8月22日(土) 夏休み博物館教室〔工作〕(午前・午後)
 - 『オリジナル万華鏡作り』
- 9月19日(土)～11月8日(日)
 - 企画展：『西村洋一水彩画展～旅の途中～』
- 11月21日(土)～平成28年1月11日(月・祝)
 - 企画展：『ひよこの灯』(予定)

【博物館友の会「フォレストクラブ」・平成27年度活動】

- 4月18日(土)
 - “土佐の投入堂” 聖神社とアケボノツツジ観察会
- 5月30日(土) 友の会総会
- 6月17日(水) 仁淀川水質調査
- 6月23日(火) 横倉山杉原神社のヒメボタル観察会
- 10月24日(土) 三嶽古道の整備・補修
- 11月14日(土)・15日(日)〔一泊二日〕
 - 視察研修：『安徳天皇花園陵墓参考地・熊本装飾古墳館等見学』
- 平成28年1月1日(金) 初日の出を横倉山で

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館



- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上)
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知——JR特急 約30分——佐川——バス 約15分——越知
JR普通 約50分



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/